



人喰い熊

作者
大黒達也

人食い熊

人間の意識が宿った人食い熊が大勢の美女達を生きたまま貪り喰う。体長三メートル、体重四百キロの巨大ヒグマ。

平岩 健一

神奈川県に本社を構えるコンピュータ会社に勤務する会社員。北海道旅行中にヒグマに襲われる。

その他大勢の美女達

若く美しい美女達。血に飢えた好色な人食い熊に、生きたまま貪り食われる。

『本編』

第一章 アベック

俺は、深い藪の中でピクリとも動かず、前方にある平屋造りの山荘を見詰めていた。既に二時間ほど、ここでじっとしていた。激しい夕立が俺の厚い毛皮に降り注いでいた。山荘には一組の若いカップルが、夕立が過ぎるのを待っていた。

夕立は、降りだしたときのように、唐突に止んだ。雲の合間から西日が射していた。アブがたかり、顔中の血を吸っていた。ときより、思い出したように、ごつい熊手で払い落としした。

俺は飢えていた。もう何日も何も口にしていなかった。

山荘からうっとりとする匂いが漏れて来ていた。それが何であるかわからなかった。半日ほど前から、そのカップルを追っていた。二人が持っている食べ物を狙っていた。

ちらりと見た感じで、女が、もの凄く美人であることはわかっていた。

俺は山荘を監視しながら、人間だった頃のことを思い出していた。

一週間ほど前まで、俺は平岩健一という三十歳の独身男だった。神奈川県に本社を構えるコンピュータ会社に勤務していた。ごく普通の生活を送っていた。

五月のゴールデンウィークを利用して、友人と北海道旅行に参加したのが、ことの始まりであった。

友人の男との二人旅は、それはそれで楽しめた。札幌に着いたその夜、ススキノで、誰の目をはばかることもなく羽目を外し、風俗店を梯子して楽しんだ。

翌日、二日酔いの頭を抱えながら、観光バスに乗った。バスは、札幌中心部から約二十キロの位置にある支笏湖を目指していた。

東西に長いマユ型の支笏湖は、周囲を深い原生林に囲まれ太古の姿をそのまま残し、人を寄せ付けない印象がある湖で、シーズンともなれば、大勢の観光客が訪れるリゾート地であった。

南岸には今なお、火山活動を続ける樽前山が聳え立ち、湖面にはジェットスキーを楽しむ若者達の歓声が響いていた。

観光船で湖巡りをした後、再びバスに乗った。バスは支笏湖を後にして、洞爺湖を目指していた。その日は、洞爺湖の辺にあるホテルに宿泊する予定であった。

バスは、支笏湖のすぐ近くにあり、観光名所となっている苔の洞門前に駐車した。苔の洞門とは、樽前山の登山口にできた、およそ四キロに渡って、苔むした岸壁の回廊が続く風光明媚な場所であった。

バスガイドの指示に従い、俺達は、他の観光客と一緒に、回廊の合間にできた道を奥へと進んだ。

俺は、いつの間にか、皆とはぐれていた。洞門の最深部まで進んでいた。遠くからカツコウの泣き声が聞こえていた。

ふと見ると、切り立った崖から一本のロープが垂れて

いた。観光客の仕業だろうと思いつながらロープを引っ張って見た。腐っているようには見えなかった。

俺は、五メートルほど上方を見上げた。崖の上は深い原生林が広がっているようだった。皆が来るまで少し冒険してみようと思った。ロープを握る手に力を込めた。

これでも学生時代は山岳部に所属していた。あつという間に五メートルの絶壁を登り終えた。

思ったとおり、目の前には黒々とした原生林が広がっていた。木々が発散する濃密な匂いが鼻についた。確かにビトンチッドとかいう物質で、鎮静作用があるというのを何かの本で読んだのを思い出した。悪い気はしなかった。

その時、近くの千島笹が、ガサガサと音を立て、突然、

巨大な黒い塊が飛び出して来た。

熊だ。とっさに思ったが、体が思うように動かなかつた。日本で唯一の猛獣と呼ばれる熊が、四つん這いとなって俺の方をじっと見詰めていた。

崖の方に後去ろうとした時、小枝を踏み付けた。

音に反応するように、熊が立ち上がった。身の丈三メートルはあると思われる熊に抱き付かれ、そのまま崖から転落した。

記憶はそこで途絶えていた。気がついてみると、人間では無く、熊となっていた。いかなる現象か思いもよらないが、身体は熊であっても、俺は人間としての記憶を持っていた。

ギーという扉が開けられる音で、瞑想から現実を引き

もどされた。西の空にきれいな日の焼けが見えた。カップルは手を繋ぎながら、山荘を出て来た。俺は二人の前に立ち塞がった。

「あっ！」という叫び声を上げて男が、女を置き去りにして横飛びに逃げた。だが、その先は切り立った崖となっていた。

「ギャー！」という絶叫を残しながら、男は滑落した。

女はへなへなとその場に腰を落とした。俺は、崖の近くによって、下を見下ろした。二百メートルほど下方に、赤いジャケットを着た男が倒れていた。近くに男が背負っていたリュックは落ちていなかった。俺は女の方に向き直った。女は蒼白な表情で俺の方を見詰めていた。女に近付き、ジャケットの襟首を噛んで、山荘の方に引き

摺っていった。

山荘の内部は、十畳ほどの広さで、床板が張られ、簡易ベッドが置かれていた。女を部屋の隅に横たえ、リュックを漁り始めた。あつという間に握り飯二個を平らげた。サバや鮭の缶詰めの蓋を、鋭い鍵爪でこじ開け、中身を食った。

だが、食料はそれだけであつた。こんなもので、体重四百キロの巨体が、満足するわけは無かつた。俺は女の方に振り返った。女は床に、仰向けに横たわり、呆然とした表情で俺を見詰めていた。目と目が合った。女は身震いしたかと思うと、失禁した。股間から床に小水が広がった。小水が鼻先まで流れてきた。俺は自然に匂いを嗅いでいた。先ほどから食欲を誘う匂いの正体が掴めた。

女の匂いだ。人間の臭覚では、よほど近くでなければ、
感じることの無い性匂を感じた。その中に濃い血の匂い
を嗅ぎ取っていた。



俺は、ふらふらと女に近付き、上から見下ろした。口元から大量の唾液が零れ落ちた。女は美しい顔を恐怖に歪ませて、咽び泣いていた。自然に前足を動かしていた。

女が着ていた衣服を紙のように切り裂いた。最初は無我夢中という感じであったが、途中から落ち着いてきた。

女の皮膚を傷つけないように、細心の注意を払って、鉤爪を使った。すぐに、女の豊かな裸身が露になった。

まだ、二十歳をすぎたばかりであろうか、肌にはシミひとつなく、すべすべで瑞々しかった。寝ていても崩れない乳房が、若さを象徴していた。

俺は堪らず、乳房を口に含んだ。何と言う歯ざわりだろうか。柔らかく、素晴らしい弾力を持っていた。思わず、噛み裂きそうになったが、なんとか堪えた。熊のさ

らついた舌を、女の胸から下腹部にかけて這わせていった。股間に鼻先を入れた。女は生理中であった。

俺は、膣口から出ていた紐を、噛んで引っ張った。血まみれのタンポンが引き出された。その瞬間、濃い血の匂いが俺を狂わせた。もう、抑えることはできなかった。鋭い牙を女の下腹部に突き立てた。



「キヤーー」

女の絶叫が山荘内に響き渡った。俺は一噛みで、臍肉を噛み取った。えもいわれぬ食感が口内に広がった。絶叫し、身悶えする女の股間を、噛み取っては、咀嚼し飲み込んだ。下腹部をあらかた食べ終わり、鼻先で女を裏返しにした。目の前に剥き卵のような尻が露になった。盛り上がった白い尻に食らい付いた。肉塊を食いちぎった。脂身が多く、まろやかで、上品な味がした。女の尻肉は柔らかく、美味でいくらでも入りそうだった。飢えの極致にあった俺は、尻肉をあつというまに平らげ、むっちりとした太腿に取り掛かった。

その頃になっても、女は生きていた。苦しそうに息をしながら、意味不明の言葉を発していた。太腿の肉も尻肉に劣らず美味であった。俺は食べるように食べ続けた。

知らぬ間に、女は絶命していた。下半身を、すべて骨まで食いつくし、今度は乳房に取り掛かった。脂身が多かったが、嫌いな味ではなかった。

乳房を食べた後で、腹腔を噛み破り、内臓を食べ始めた。レバーと心臓は最も美味であった。

俺は、時の経つのも忘れて貪り続けた。次第に周囲が暗くなっていた。

気が付くと、俺は女の肉を、頭部以外すべて食べ尽くしていた。身長百七十センチ体重五十キロ近くはある女を、まるごとひとり食べたことになる。

俺は、床に寝そべって、大きな欠伸をした。満腹であった。動くことができなかった。不思議と、女を殺して食べたことについて、罪の意識を感じなかった。

何時の間にか寝入っていた。

第二章 人妻

ドーンという大地を揺るがすような音が、頭上から聞こえてきた。俺は、山間部をくり貫いて造られた国道の下の藪に潜んでいた。若い女が、サイクリングで頭上を通りかかるのを期待して、半日ほど待っていた。だが、通り過ぎるのは、乗用車か大型トラックばかりであった。

俺は、ガードレールの下から、首を伸ばし、周囲の様子を伺うようにして辺りを見回した。すぐ目の前に、乗用車が崖側に突っ込み、大破していた。近くに若い女が倒れていた。俺は巨体を器用に操り、ガードレールをのり越えた。乗用車に近付き、中を覗きこんだ。運転席に

は、頭蓋が割れ、血まみれになった男が、座っており、まったく息をしていなかった。後部座席には、生後三ヶ月位の乳児が、仰向けに倒れていた。首があらぬ方向を向き、ピクリとも動かなかった。

飢餓状態にあるが、赤ん坊にはまったく食欲を感じなかった。肉質からいえば、柔らかく美味とは思うのだが。

俺はその場を離れ、赤ん坊の母親と思われる女に近付いた。奇跡的に女は生きていた。衝突と同時に、車外に放り出されたものと思われる。側溝脇の芝生がクツションとなって一命をとりとめたようだ。意識を失っているようだが、しっかりと呼吸をしており、怪我はしていないように見えた。二十代半ばくらいの年齢で、容姿は整っていた。いや、もの凄い美人といえた。ミニスカート

が捲りあがり、むっちりとした白い太腿が俺の視線を釘付けにした。

その時、遠くの方から、車のエンジン音が近付いてく
るのが聞こえた。俺は、女の襟首を噛んで、引き摺るよ
うにして、ガードレールを越えて、樹海へと戻った。

俺は、鬱蒼とした木々に合間にあり、清流が流れる川
原にいた。川幅は五メートル、水深が三十センチくらい
で、岩底に水草が揺らめいていた。お気に入りの場所
であった。目の前の大岩に、女を横たえていた。衣服はす
べて剥ぎ取っていた。女は失神から覚めず、静かに息を
していた。子供を産んだとは思えないほどに、美しい肢
体を持っていた。寝ていても乳房は型崩れせず、乳首も
黒ずんではいなかった。剥き出しにされた膺はきれいな

ピンク色をしていた。

三日前に、登山者の若い女を食らって以来の食事であった。かなり飢えてはいるのだが、ただ、食べてしまうのは惜しい気もした。人間の肉体は失っても、性欲は残っているようだ。食べる前に楽しむことにした。むっちりとしてスベスベの白い太腿を押し開き、臍に顔を付けた。若い女の素晴らしい匂いがした。いっそう、食欲は高まったが何とか抑えた。熊のざらついた大きな舌で、臍をペロリと舐めた。たまらなくなり、臍からアヌスにかけて、ががつととした感じで、舐め回した。

「ああ……あん……」

女が喘ぎ声をあげ、上半身を動かした。女が目を覚ましたようだ。俺は臍を舐めながら、女の顔を見上げた。

女は、呆然とした表情で、俺の顔を見詰めていた。すぐにガタガタと震え出した。女は俺から視線を離そうと努力しているようだが、まったく身動きができないようだった。俺は熊の顔でニヤリと笑って見せた。

「キヤー！」

女の呪縛が解けた。恐怖のあまり失禁した。俺は嬉々として女の小水を飲み込んだ。塩分が不足していたので、身体中に活力が漲る感じがした。俺は再び、震え慄く女の臆を舐め始めた。俺は女をいかせたいと、本気で思っていた。絶頂に達した女を、貪り食らうつもりであった。

時間をかけて、臆やアヌスを舐めまわした。次第に女の下半身から力が抜けた。女は目を閉じて、何かに堪えるように、眉間に皺を寄せていた。

「あああ…いい…。逝っちゃう…」

女が喘ぎ始めた。死を目前にしての快感とは、どのようなものか。女は喘ぎ始めると、大胆な態度を示すようになった。俺の頭を、太腿で締め上げ、背を仰け反らせるようにして、喘いでいた。膣は愛液で濡れ濡れになっていた。突然、女が鋭い喘ぎ声をあげ、果てた。俺は息を弾ませている女を、鼻でひっくり返した。盛り上がった白い尻から食べるつもりであった。一人目の女で味をしめていた。女の肉では尻が最も美味であった。目の前に剥き卵のようにスベスベな尻があった。大量の唾液が、女の尻に零れ落ちた。

俺が、大口を開けて齧り付こうとしたその時、女は危険を察したのか、起き上がり、四つん這いになって、尻

を淫らに動かして、俺の鼻面に、アヌスを擦りつけた。

「食べないで。お願い。殺さないで……」

女は、その姿勢で、顔を後ろに向け必死に懇願した。女は、助かりたい一心で、熊の俺に抱かれようとしていた。俺の股間もさつきから、限界に達していた。おもむろに女の尻を抱き、細長い陰茎を、濡れ濡れの膣に、のめり込ませた。

よく締まり、最高に気持ちが悪かった。女は狂ったように喘ぎ、腰を振った。

俺はいく寸前で、何とか女から離れ、仰向けになった。股間から白濁した精液が宙に向けて迸った。女の中に、出さなかったのは、これから食らおうというときに、熊の汚い精液で汚したくなかったからだ。



大岩の上に座り、呆然とした表情で、俺を見詰める女を仰向けに、押し倒した。そのまま盛り上がった白い乳

房を口に含んだ。一噛みで食いちぎろうとしたとき、口内に母乳が流れ込んだ。女が乳児の母であることを思い出した。

女の乳は、物凄く美味に感じた。母乳は不味いと聞いていたが、熊の味覚には合うようだった。俺は無心に吸い続けた。片側の乳房の出が悪くなったので、もう一方を口に含んだ。

女は目を閉じ、眉間に皺を寄せ、歯を食いしばるようにして耐えていた。一滴も出なくなった。そろそろ食べごろだった。そのまま、一気に根元から食いちぎった。女の裸身が跳ねた。白目を剥いて失神した。片方の乳房を残したまま、柔らかく、脂身が多い乳房を咀嚼しながら、下腹部へと顔を下ろしていった。

愛液と小水で濡れた膣に食らい付き、全体を一噛みで噛み取った。コリコリとした歯ざわりが最高だった。下腹部を噛み砕き、子宮を口で引きずり出して貪り食った。鼻先で、女の裸身を裏返しにして、盛り上がった白い尻に齧り付いた。オオトロにも負けない甘味が、口一杯に広がった。たて続けに柔肉を噛み裂き、飲み込んだ。いくらでも食べることができた。

尻肉を食らい尽くし、腿肉に移った。ここも脂が乗って美味であった。女は、意識を戻し、苦しそうな息をしていた。脹脛の肉も残らず、食い千切った。女を仰向けにして、腹腔を噛み裂いた。女は目を閉じて、眠るよう
に絶命した。女の肝臓や心臓も残さずきれいに食した。
残っていた片方の乳房も、食い千切った。柔らかい手も、

強靱な犬歯と臼歯で噛み砕き、飲み込んだ。女の身体は柔らかく、非常に美味であり、残すところは少なかった。半日かけて、頭部以外をすべて、胃袋に収めた。俺はテールブルがわりに使った大岩に凭れ、いつのまにか寝入っていた。

第三章 暴走族

その日は朝から、気分が悪かった。空腹であるということも原因ではあるが、深い眠りから、けたたましい騒音で叩き起こされた。だが、それもほんの一瞬のことで、すぐに上機嫌となった。信じられないことであったが、このような山奥にあって、クラクションやエンジンを空噴かしする音が、下流の方からひっきりなしに聞こえて

きた。これまでは、上流側が俺の活動エリアであり、下流へは足を踏み入れたことが無かった。

俺は、大岩の上で起き上がり、清流に沿って下流へと向かった。百メートルほど、進んだとき、前方が急に開けた。川幅も広くなり、玉砂利が敷かれた川原があらわれた。俺は近くの茂みに身を隠し、目をこらした。十メートルほど先に、一台の乗用車を取り囲むように十台近いバイクが止まっていた。その車を、大勢の男達が、バルや鉄パイプで殴りつけていた。男達は、俺の存在にまったく、気がついていないようであった。

ドアがこじ開けられ、三人の若い女達が引きずり出された。三人ともミニスカートのTシャツ姿であった。む

つちりとして長い太腿が無残に震えていた。

女達のあげる絶叫が、周囲に響き渡った。すぐに、男達が、纏わりつき、女達の衣服を、引き裂き始めた。素っ裸に剥いた女達を、車体の上うつ伏せにもたれさせ、盛り上がった白い尻や膣を手や口で弄び始めた。

「最高のスケだぜ！」

「見ろよ。この白いケツを！涎が出てきたぜ」

男が、泣き叫ぶ女の尻の合間に顔を押し込んだ。女達は、ドライブ中に暴走族に目を付けられ、ここまで、強制的に誘導されたのだろうか。しかし、こんな山中で暴走族とは、不思議であった。とにかく、朝飯いや二、三日分の食料は確保できそうだった。もう少し、様子を見ることにした。男達の陵辱がエスカレートしていた。全

員が男根を剥き出しにして、女達にフェラチオを強制していた。女達は、嗚咽を漏らしながら、男根を啞え舐めていた。男達は、皆、一度は女の口に放った。ぐったりとした女達の髪を驚つかみにして、清流まで引き摺っていき、流れに投げ入れた。男達も膝まで、水に浸かり女達の裸身を、ダイコンやキャベツ等の野菜を洗うような手付きで、清め始めた。水洗いされた女達は、男達が用意していたビニールシートの上に運ばれ、本格的な責めが始まった。女の盛り上がった白い尻に顔を埋める者や、乳房を舐め回す者や、臍に指先を出し入れする者等、入り乱れての乱交であった。女達は髪を振り乱し、身悶えし、泣き叫んだ。

こんな山中にあっては、いかに叫ぼうとも、誰に聞こえる筈も無かった。女達の泣き叫ぶ姿が、さらなる刺激となつて、男達の欲情をいつそう引き立てているようだった。男達は、顔を醜く引きつらせ、女の白い裸体を責め続けた。

そのうち、女達は、それぞれが、口、膣、アヌスと身体中のあらゆる穴を、同時に貫かれた。容赦の無い責めであった。人間としての扱いは微塵も感じられなかった。

女達は獣のように犯され続けた。俺の欲情と食欲も限度に達していた。ゆっくりと四つん這いとなり、一気に駆け出した。両肩の巨大な筋肉の瘤が、上下に揺れ動いていた。性欲に溺れきっていた男達は俺の接近にまったく気がつかなかった。汚いケツを動かし、女の膣を貫いて

いた男の脇腹を熊手で、叩いた。男は、内臓を撒き散らしながら、四、五メートルも横に吹き飛んだ。

男女があげる悲鳴で、辺りは騒然となった。女達は腰が抜けたようで、その場に蹲り泣き叫んでいた。俺は逃げ惑う男達に襲いかかり、熊手で顔面を砕き、首筋を噛み裂いた。生首が宙を飛び、脳漿や鮮血が迸った。

誰も挑みかかってくるものはいなかった。女のような悲鳴をあげて、逃げ回っていた。男達を食らう気は無かった。ただ、暴走族自体大嫌いだった。殺すことに快感すら覚えていた。一瞬の内に十数人の男達が、脳天を割られ、腹を引き裂かれ、地面に横たわっていた。俺は、怯えきって、茫然自失で座り込む女達に近付き、膝の骨を前足で叩き折った。女達をひとりずつ、肩に担ぎ、上

流にある隠れ家を往復した。

女達を運び終え、男達の死体とバイクを、茂みの中に隠した。車もニュートラルのままだったので、近くの茂みまで押していった。男達の血や脳漿が、散らばっていたが、この辺はめったに人が来ないし、雨が降ればきれいに流される筈であった。

膝の骨を叩き折られ、歩くことができない女達三人は、大岩の近くに横たわりピクリとも動かなかった。どうやら、死んだふりを決め込んでいるようだ。よく言われるように熊に会ったら死んだふりをしろというのは、大嘘だ。俺は熊になる以前から、知識として知っていた。山中で熊と遭遇し、むかってきたら鉋のような刃物で切り

付けるしか手はない。罨は凶体に似合わず、臆病な生き物なのだ。もつとも、心が人間である俺には通用しないが。まったく、食べてくれと言わんばかりだ。顔を近付けてみたが、三人とも俺好みの美人だった。年は二十歳を越えたかぐらいで、肌は瑞々しく、スベスベだった。色白で手足が長く、乳房の発育も申し分無かった。尻の盛り上がりは、生唾ものだった。

股間やアヌスから男どもの精液が滴り落ちていた。俺の股間も、限界に達していた。女達を、ひとりずつ、首を軽く噛んで、持ち上げ、大岩にうつ伏せの姿勢で寝かせた。三人の見事な美尻が並んだ。壮観な眺めだった。体重を前足で支え、右端の女の尻を抱いた。陰茎が膣を貫いた。入れる瞬間の締め付ける感じがたまらなかった。

いく寸前で、隣の女に移った。女達は、それでも死んだ振りを装っていた。全身の震えは伝わってきていたが。

左端の女に移り、精液を吐き出した。

俺は、女達の尻を眺めながら、暫しの余韻に浸っていた。やおら、起き上がり、ひとりずつ、首を噛んで、清流の方へと引き摺っていった。三人を、十センチくらいの浅瀬に横たえ、厚い毛皮に覆われた前足の甲で、全身を水洗いした。膣やアヌスは特に念入りに洗った。女達の裸身を清めてから、大岩に、うつ伏せに寝かせた。さつきから、俺は、どの女から食べようか、迷っていた。

どの女も肉は柔らかそうで、美味に感じられた。一番右側のセミロングの女から頂くことにした。女は、美しい切れ長の二重瞼を持っていた。鼻筋も通り、唇がまた、

柔らかさそうだ。俺が覗き込んでいるのがわかってか、女はいつそう激しく震え出した。女の盛り上がった白い尻をペロリと舐めた。鼻先を押し込み、アヌスから膣にかけて、舐めまわした。若い女の性器は、素晴らしい味があった。俺は、時の経つのも忘れて、舌を使った。女の尻がもぞもぞと動き出した。時折、堪えられないのか、鋭い喘ぎ声を漏らした。ちょうど、食べ頃だった。俺は、鋭い牙を剥き出しにして、尻の膨らみに食らいついた。

「ギャー！」

女の絶叫が聞こえる中、俺は、柔肉を食うのに夢中になっていた。何度、食べても、たまらなく美味であった。隣で死んだふりをしていた女達が、四つん這いになって、逃れようとして、大岩から転げ落ちた。俺はかまわず、

女の尻を貪り続けた。尻肉を食らいつくし、腿肉や乳房や膣も噛み裂き、飲み込んだ。一度、食べ始めたら止めることができなかった。女の主要な部分を食べ終わる頃には、日が暮れかかっていた。息絶えた女の内臓を食べ尽くし、残る二人の女を捜した。

女達二人は、両手だけで、三十メートルほど進んでいたが、流木が進路を塞いでいたので、それ以上、先へは進めなかった。俺は睡魔を抑えながら、女達に近付き、再び大岩の近くまで運んだ。身悶えし、泣き叫ぶ二人の女達の柔らかい裸身を、胸に抱いて目を閉じた。明日はどっちを食らおうかと考えているうちに、眠りに落ちた。

翌朝、空には、どんよりと重たい雨雲が立ち込めてい

た。俺は目覚めてすぐ、ぼんやり暗い空を眺め、そして、懐のご馳走達を見つめた。二人とも、すでに目覚めていた。あるいは、眠らなかったのか。泣きはらしたような顔をしていた。視線が宙を漂っていた。恐怖のあまり、気がおかしくなったようだ。

ひとり、玉砂利が敷かれた地面に横たえ、残るひとりを大岩に、うつ伏せの姿勢で寝かせた。

目の前に、美味そうな白い大きな尻が、そえられた。大量の唾が、口元から、あるいは、牙の先から滴り落ちるのを感じた。と、その時、女が、小さな声で、子守唄を歌い始めた。女は完全に狂っていた。俺は食らう前に、透き通った女の歌声を聞きながら、尻を思う存分に舐めまわした。女の尻は最高に食欲をそそった。女のアヌス

や膾はきれいなサーモンピンク色だった。もう少しで、俺の胃袋に納まるのだ。俺は、前足で女の腰を押さえつけ、尻の盛り上がりには牙を突き立てた。湧き出る甘い血液が喉の奥に流れ込んだ。俺は牙に力を込め、顔を左右に振り、尻肉の塊を、噛み千切った。女は、全身を震わせ、呻き声をあげていた。

第四章 婦人警官 へと続く